東京家政学院筑波女子大学紀要第７集　（27）～（39）ページ

『武道伝来記』論　その六

佐々木昭夫

十六

小論は西鶴の『武道伝来記』をはじめから順に見てきた。ここで巻四の第一「太夫格子に立名の男」を扱うわけだが、この作品についてはすでに以前（本紀要第四集、二〇〇〇年三月『武道伝来記』論その三）で触れた。巻二の第三「身袋破る落書の團」を論じる際、敵としてねらわれている者がいさぎよく討たれることを願うという主題が巻四第一と同一だったからである。その時、基本の大枠は同一でも両話はまるで違った作品であることを言い、その違いがそのまま両作品の本質を明らかにするとした。巻二第三を論じることが主旨だったから、巻四第一には触れることのなかった点がいくつかある。それを見てゆく。

まず重要なのは榎坂専左衛門弟専兵衛の存在である。まだ部屋住みの身だろうが、当然のこととして専兵衛は専左衛門の未亡人と遺児を介抱し、兄を討った敵が誰か明らかにしようとし、青柳十蔵と分かった後は探し出して敵を討とうとする。だが敵の行方を尋ねあぐねているうち、ある日突然「出来心にて兄嫂を思ひ初」、兄嫁に迫ったので、兄嫁はせん方なく専兵衛を刺し殺し、みずからも自刃して果てる。生真面目な青年とのみ見えた専兵衛の最後の行動に我々読者は驚かされる。だが不思議なことに違和感はなく、不自然さは全く感じられない。この人物の描き方には細心の注意が払われてい、当然の成り行きと感じられるからだ。それを見てゆく。

専兵衛は専左衛門が青柳十蔵に討たれた記述のすぐあと登場する。

専左衛門弟専兵衛其夜の明かたに聞つけ其所に行て。さま〳〵せんさくすれ共遊女町の者相手はしらぬ極り辻番仁女言てかひなく。先死骸を取置て其後屋形に立歸り無念かさなり身をもだへて。うち手分明ならねば是非なし。然も掟をそむき夜中に屋敷を立出。其上所あしき身の果彼是御立服あそばされければ。御長屋にたまりかね

早朝から駆けつけてさまざまに捜査を開始したというのは当然だ。注意をひくのは、空しく屋形に帰ってからの「無念かさなり身をもだへて」の語である。なすべきことはちゃんとする。だが

決して楽天的な性格ではないことを読む者はこの一句でもう感じ取る。「無念かさなり」は普通の反応と言えるが「身をもだへて」と続いているので、それがいささか異常となり、この青年が兄専左衛門――夜中に屋敷を抜け出して遊里を遊び歩く呑気で浮わついた楽天家と想像される兄――とはまるで違った性格の持ち主、几帳面で生真面目、常に未来を暗く考えずにはいられない男であることを示す。だから「是非なし」の語は、それできれいさっぱりあきらめたというのではなく、ひたすら専兵衛の心に重苦しくのしかかる思いであり、「然も掟をそむき夜中に屋敷を立出。其上所あしき身の果」は次に書いてある藩主が立腹したことの説明だが、それと同時に専兵衛の心中次々に生起した兄専左衛門の死のどうしようもない具合悪さが「然も」「其上」とたたみかけて彼を苦しめたことを巧みに表現してもいる。「うち手分明ならねば是非なし。然も」と続いているから、是非なしの専兵衛の苦しい想いが次の語にも続くことになるわけだ。誰とも知れぬ敵に対する憎悪はあろうが、死んだ兄への恨みも生じただろう。藩主が「彼是御立腹あそばされければ」とはもはや当然の成り行きである。だがこれは専兵衛の悲観主義的な見方以上に重要だろう。敵が知れ専兵衛が敵討に旅立ったとしても、それは決して藩全体の公的な援護も心理的な支持も受けたものでなく、もし敵討に成功したとしても前知、亡兄の石高を保証されたものとも言えまい。前途の希望のない敵討である。

次にあらわれる専兵衛の記述は次の通りである。

専兵衛は安倍川のほとりにしのび行て喧嘩の次第世の噂を聞どもいよ〳〵相手はしれざりき。この事無念なれ共是非なく色こ思案めぐらし。兼て愛扨悪敷人もやと吟味せしに其思ひ當りし事もなし。分別つきはて世間の人にあふも恥かしく。脇道にさしかゝり

前の専兵衛の記述と全く同様である。懸命にあの時の兄の喧嘩相手を探しているが何の手がかりもない。「無念なれ共是非なく」と、前と同様の言葉が繰返され、「是非なく」が諦めきった心境ではないことも前と同じであり、読者の専兵衛に関する判断をひたすら強めている。「是非なく」と言いながら「色こ思案めぐらし」と頭をしぼり、考えるべきことはもらさず考えぬいているが、兄の親友の青柳十蔵とは思いつかない。思いつくためには推理に或る飛躍が必要である。無念がり溜息をつきながらでは思いつけない。「兼て愛扨悪敷人」はいかにも専兵衛の考え出しそうな対象である。「安倍川のほとりにしのび行て」また「分別つきはて世間の人にあふも恥かしく」は、相手が全くわからず当惑し切っていることを恥と感じる気持ちもあるのだろうが、何よりも不名誉きわまる兄の死が専兵衛を苦しめるのだ。その姿を見て健気と感ずる者の存在など専兵衛自身には考えられもしまい。くどいほど強調される専兵衛の苦しみである。それはただでさえひどいのに専兵衛の性格のために幾倍にも強められているというわけである。

次いで喧嘩の夜乞食の拾った羽織から相手が知れるが、専兵衛の忍耐もほとんど限界に来たところで、幸運にもある展望が開けるわけだ。専兵衛が何事かと近寄ったときの乞食たちの様子は「専兵衛勢におそれてとがめぬ先に聲をふるはし」とある。当時乞食非人たちにとって侍は危険きわまりない恐ろしい存在だったろうが、それにも増してその時の専兵衛は沈痛な暗い絶望を身の廻りに漂わせていたはずで、それを充分に表現している。専兵衛

が羽織と引き換えに「有合せたる金子」を与えたのは、不意に敵が知れて嬉しかったこともあろうが、もともと彼は特に意地悪な性格などではなかったことを示す。彼はひたすら几帳面なのだ。

此絞所を證據に十蔵をねらひける。此さた屋敷に聞えて十蔵妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて専兵衛なを悔て。おのれとしれぬうちこそなれ。天をわけ地をさがし此本望とぐべしと一筋に思ひ定め。十蔵生國出羽の山形の者なれば。

せっかくほんの偶然のことから敵が知れたというのに逃がしてしまったというのだが、このくだりを読むともっと早く何とかならなかったものかと思われる。十蔵を逃がしてしまったのは大変なヘマだったが、「天をわけ地をさがし此本望とぐべし」という固い決意にもかかわらず、もし専兵衛にとって十蔵を討つことが本当の喜びだったなら、相手に知られるより先に十蔵を捉え詰問し斬り合いに持ち込めたのではないか。「此絞所を證據に十蔵をねらひける。此さた屋敷に聞えて十蔵妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて」は、こんな場合の行動の記述としてはどこか間が抜けている。専兵衛がその足で十蔵を斬りに行ったのではなく、正式の規定通りに敵討を出願したのではないかと疑わせる。専兵衛にとっては単なる私闘にしたくなかったに違いない。だがそれでは相手に逃げられるのは当然である。それに本当に憎い相手を討ち、恨をはらす喜びだけではなく、やはり敵討は一つの義務でもあったのだろう。逃げられたから「専兵衛なを悔て」と口惜しさが幾層倍にも感じられる。自分の苦しみの基である青柳十蔵への憎しみもそれだけ強くなっただろう。「おのれとしれぬうちこそなれ。天をわけ地をさがし此本望とぐべしと一筋に思い定め」は強い決意である。だが、この時になってようやくここまで到達したとも言える。

専兵衛のこうした性格、兄専左衛門が斬られたときのあのような不名誉な事情、これらを考えれば普通の人間にとってもあれ程辛く苦しい敵を求めての旅がいかにひどいものであったかが理解される。

十蔵生國出羽の山形の者なれば。爰に立越一年あまりもねらひしにいまだ故郷へは帰らぬに極り。又駿河に戻りてむなしき年月をくるうちに。

十蔵の生國で一年余見つからなかったから駿河へ戻ったという行為は、多くのことを我々に教えてくれる。『武道伝来記』一篇だけを見ても敵が発見出来なかったからと言って国へ戻ってぶらぶらしているという人物は他にはない。だが専兵衛には、全くの当てなしに全国をしらみつぶしに敵を探して歩き廻るということができなかったのだろう。後に専太郎に討たれようとして懸命に追って歩く十蔵とは対照的だ。それに第一、彼の敵討への旅立ちは前にも述べたように、公式に藩士仲間の賛同と支援を受けたものではないし、敵討に成功したからと言って、その先自分の運命が開けてくるというわけでもない。後に専太郎の敵討への門出も同じだった。だが専太郎にはいわば身近かな庶民達の真実の同情があった。「いづれもに暇乞て思ひ立行心入石流侍の子也とてをの〳〵涙にくれける」昔専左衛門につかえた小者まで自ら志願してついてきてくれた。一年余も十蔵を探しあぐねてまた興津に戻って来た専兵衛は、前途に一筋の光明もなく、「むなしき年月

をくる」ほかない。生真面目な青年が兄嫁にああしたとんでもない野望を抱くということが作品内で可能となるために、西鶴は作家としての力量の限りを尽くしている。長い間追いつめられ絶望の果てにある心理は充分納得のゆく書き方をされている。専兵衛が「其夜から出来心にて兄娌を思ひ初」たというその一日の情景も、きわめて簡潔ながらその雰囲気をも写し、意識的無意識的を問わず専兵衛の心理を読者に納得させる。

頼みし宿のあるじ一子に娌をむかへけるに。草ふかき所なれば祝言の作法も弁へなく。専太郎母人に尋ねける。此人都そだちにして万事心え給へは銚子の取まはしすへ〳〵の女にをしへられしよそほひ。昔の姿残りてうつくしき生れ付なり。専兵衛は眞那板にかゝり結び昆布など拵へしが其夜から出来心にて兄娌を思ひ初。

専左衛門の遺族が厄介になっているひなびた庶民の家で娌とりの晴れがましい儀式が行われる事になり、専太郎の母は京育ちだったので祝言の作法を皆に教えたという。この女性については、専左衛門が討たれ専兵衛の世話でここに越してきたときの嘆き、しかし一旦は海に身を投げることを思いながら思いかえし、嘆きを内に押し殺し専太郎を鍛える。そうした健気な姿を読者は知らされていた。品の良い都育ちのしかも生来の美女だったことはここで初めて知らされるが、それが意外でないのは海に身を投げようかと思ったときの夜の海の光景、清見寺の鐘の音、それを聞いて思い出す謡曲「三井寺」、それらによって、この女性は悲哀に満ちた抒情性を身に漂わせて印象づけられていたからである。田舎女たちに作法を教えているときの「昔の姿残りてうつくしき生れ付なり」の一文は毎日「愁を胸にふくませ面は鬼に見せて」専太郎をしごいているこの女性が、ふと見せた女らしさを表現し、普段はいかに化粧など忘れていようと、もともと美貌の持ち主だったと言うのだが、「をしへられしよそほひ。昔の姿残りてうつくしき生れ付なり」には言葉そのものに或る品の良い美しさがある。このとき「専兵衛は眞那板にかゝり結び昆布など拵へしが」とあり、彼もこの田舎屋でのつましくもめでたい行事に参加している。世話になっているのだから当然だろうが、この姿は現在の彼の存在の意味をそのまま示しているかの感を与える。特にこの「結び昆布」という具体物の名が何故かその感を強める。縁結びにかけて縁起の良さからこのような祝に使われるのだろうが、そうした意味とは全く無関係に、専兵衛が眞那板でこの卑小な具体物を扱っているということが我々を強く刺戟する。それが他の人物、専兵衛のような事情を持たない人物であれば、たとえ高禄の侍であったとしても何ということもない。専兵衛が前途を完全に閉ざされた青年であり、本人もそれを痛いほど自覚しているから、この情景、特に結び昆布が彼自身を象徴するのだ。

ところでこの日の夜になって「出来心にて兄娌を思ひ初」という文は何を示すのか。専兵衛はこれまで兄嫁を見てもその美しさに気付くことはなかったのか。その通り。兄嫁を美しいと思うことは専兵衛にとっては当然の、ひとつの意識されていない禁忌だったのだ。その禁忌が取り外されてしまったとは、専兵衛の絶望がここでついに限界を越えたことを示す。もうどうなっても良いといった自暴自棄的な心の動き、それはすぐに恋情へと進み、あれ程彼の心情と行動を強く縛っていた「武士の義理」など瞬時に忘れられ行動へと進んで兄嫁を口説きにかかる。それにしても専兵衛の行動「専兵衛更に聞分ずして猶〳〵無理を進み夜着の

下臥する時」は女性を口説くにしては、あまりに拙劣である。専兵衛にはこうした経験が乏しかったという以上に、彼が今全く自棄的になってしまったことを如実に物語っている。これは絶望の行為なのだ。

西鶴が以上のように専兵衛を丹念に描き、破滅に至る道筋を極度の合理的必然性をもって描いたことの理由は何か。このような専兵衛は作品でどのような役割を果しているのか。このあまりの美事さは、西鶴が自分はいかに人の心をよく知り、それを簡潔に表現するすべを心得ているかを読者に対して誇りたくなったとも考えられるだろう。しかしそれは枝葉末節のことである。それだけではないとしたら専兵衛がこの作品でどういう意味で設定されているのかをまず見てみる必要がある。するとすぐに次のことが分かる。専兵衛は青柳十蔵との対比に於いて書かれているということだ。一話の前半で十蔵なる人物は「十蔵首尾よく専左衛門うつて捨。取まはしよく立のき屋敷にかへりさたなしにして世上を聞あはせける。」だいぶ経って専兵衛に敵は十蔵と知られた時の「十蔵妻子もなき者なれば。立のき行がたしれずなりて」で読者に知られるのみである。十で述べたように「世上を聞あはせける」には何となく狡猾な人物像が示されているだけで、専兵衛を中心とする専左衛門遺族の苦しみと絶望の様子が語られる間十蔵は背後に隠されている。専兵衛も専太郎母も亡くなり、専太郎は十三才に成長していよいよ敵十蔵を探しに旅立ってから、ようやく十蔵に筆が及ぶ。それは言葉を惜しんだかのような途切れ〳〵の十蔵自身の述懐である。述懐としては専左衛門死の直後の妻の歎きがあった。あれと対比せざるを得ない。あの五七調の抒情的な、淋しく月光の魔力の照らす夜の光景を背景に「三井寺」を思い出して母としての決意を新たにするくだりである。それと対照的に十蔵のそれはごく散文的、ひとり心中につぶやいた言葉の片鱗にすぎず、リアリティに溢れる一方、何と言っても無量の思いを説明するには言葉が足りないと感じさせる。しかし読者は、その行為がこれ程の悲劇を多くの人々にもたらした青柳十蔵は何を考えているのだろうと、無意識のうちにも十蔵の心の中の示されるのを心待ちにしていた。こうして「此事十蔵傅へ聞て」以下語り出される十蔵の内心は強い表現力を持っている。

此事十蔵傅へ聞て若年の気をつくし。我を打べき所存専左衛門子なりつら〳〵世の有様を観ずるに菟角は夢に極まれり我専左衛門を打て後其まゝ切腹すべきこそ武道なれ。さもしき心底おこりて世をしのび人のそしりを請ぬる事もよしなし。我かたより名乗出て子細なくうたれて専太郎が本望をとげさすべしと。

言葉の足りなさが逆に多くのことを語る。一語一句が豊かな意味に溢れていることを感じさせながらも生々しく読者に訴える。「若年の気をつくし。我を打べき所存専左衛門子なり」それでも冒頭のこの一文、衝撃的な強さを持ちながら正確な意味ははっきりしない。読む人ごとに違うだろう。それは十蔵が専太郎のことをどれだけ知っていたと判断するかで変ってくる。専左衛門と親しい友だったから総領の男の子がいたことくらいは知っていたろうし、少しあとの「専太郎が本望をとげさすべし」の語調からは、専太郎の名も知っていたとも受け取り得る。一応その推定が最も可能性が高いとし、正反対の、専太郎の名もその存在自体もこのとき初めて知ったとする仮定とを比較してみると、この一文の意味あいがかなり違ってくることに気づく。初めて専太郎のことを

知ったとすると「専左衛門子なり」は極めて強く、さまざまな感慨を込めた思いが一気に十蔵をとらえたということになる。専太郎の存在もその名も知っていたとすると、――その場合でも普段は忘れてい、専兵衛はやっかいな存在と意識していたのと違って、専太郎のことを考えることはあまりなかっただろう。この時改めて思い出させられたのだ。そしてその場合には「専左衛門子なり」の背景に潜む感情は衝撃的な強さを持つなどということはあまりない。だが「若年の気をつくし。我を打べき所存」で読者の想像させられる十蔵の心理はにわかに深く複雑なものとなり、我々は多くの想いを強く実感せずにはいられない。ある驚異の念とともに、自分を探している専太郎のあれこれの姿を思い描き、それは当然辛苦に満ちたものと想像し、年令を考えて痛々しささえ感じている。「専左衛門子なり」はさすが専左衛門の子だといういささか身贔屓な判断だが、ここでもう十蔵は専太郎に対して一種父性愛的な感情を抱いていることが示されている。巻二の第三の篠原文助との差はそこにある。「我かたより名乗出て子細なくうたれて専太郎が本望をとげさすべし」は当然の願望ということになり、それから必死で専太郎を探し続けたのも十分理解できることとなる。

西鶴はこの一篇で語り手をして手放しに青柳十蔵を讃美させている。「専太郎に手むかひせすうたるゝ覚悟の心入ためしなき男なり」。目録では「大夫格子に立名の男――形は埋めと武士は朽ざる事」とある。十蔵のことを言っているわけで、「武士は朽ざる事」があるから「立名の男」もはっきり名誉の名が立ったということになってしまう。このことから判断できるのは、当時の大かたの読者は――武士だろうと町人だろうと――青柳十蔵に対して否定的なことが予想されたので、作者はことさらに己の人間的価値観を闡明にしておこうとしたということである。読者をして十蔵と専兵衛を比較させたのもそのためである。ふとした口論から斬り合いになって友を討ち、卑怯にも逃げ廻った揚げ句、友の子が敵として自分をねらっているのを知っていさぎよく討たれようと決意する男と、兄を討たれたため敵をねらうが、兄の討たれたのが遊里で、しかも夜中に屋敷を抜け出してなど不名誉な死だったために、敵討ちの前途が悲観的で、敵もなかなか見出せず、絶望のあまり兄嫂に出来心で恋情を抱き、犯そうとして殺される男、一見どっちもどっちといった二人である。この一話の書き手は決して専兵衛を悪く書いてはいない。最後の兄嫁への出来心も、そこまで達するには充分心理的な必然性のあったことを示していた。我々読者は専兵衛のこの行為が心理的に充分理解できるのだ。ではなぜこの等価とも思える二人の男の一方のみがあれ程讃辞を浴びせられるのか。夢のようなこの世の中で両者とも善悪両面を備え、間違ったり正しい道を進んだりする。憐れむべき弱い人間というだけではないか。専兵衛は正から邪へ、十蔵は邪から正へ、先か後かの違いは当然大きいがそれだけではない。西鶴はこの二人の間に本質的な差を見た。しかもそれは西鶴にとって極めて重要だったらしい。書き手をして十蔵をかくも立派な侍と称揚せしめたものそれは、専太郎が自分をねらっていると聞いたときの十蔵の心中に萌した感情、前に父性愛的感情と言ったものである。この人間的感情の有無が十蔵と専兵衛を画然と分かった。もち論複雑極まる感情で父性愛的なものが大きいがそれに限るまい。「つら〳〵世の有様を観ずるに菟角は夢に極まれり」以下十蔵の胸は万感交々である。自分が討った旧友専左衛門へのある懐しい思いもあり、逃げ廻っている間の、さもしく生をむさぼり、希望もなくうつろで荒れ果てた日々の記憶もあり、悔恨もあ

りといった具合である。だが専太郎に討たれることが、十蔵にあってはいかに唯一の生の希望、真実の人間的な願望であったかを示すために西鶴は多くの設定をしている。専太郎に出逢うべく国中追って廻ったが、すれちがいを重ねたこと、それに死に瀕したときの、「死去の後形を此まゝ土中に筑込。専太郎尋ね来らばたとひ白骨となる共。二たび我を堀出し敵をうたせ給へ」の強い言葉など、すべて彼の熱意がいかに鞏固だったかを示す。十蔵の死骸が埋葬してから百日以上経っているのに、「ありし姿のさのみかはらず。生ある人の眠れるごとくなり。」という点、さらに「はしり寄て聲をかけ。榎坂専左衛門が世忰専太郎なるが親の敵のからだなればうつといへば。十蔵死骸眼をひらき笑ひ臭して首さしのはす。」も同様といえるか。ここではむしろ作者西鶴が、死んだ後でもなんとか専太郎に討たれたいという十蔵の熱意をいかに表現したがっているか、それを意識的に読者に伝えようとしている。当時の読者にはここに書かれたことをごく普通の怪異現象と受け入れ、成る程十蔵の念願の強さはこんなことも可能にさせたのかと感心する者もいたろうが、世に怪異現象など存在すること自体全く信じない者も、多くはないだろうがいた筈である。後者は百日の間「さのみかはらず」という事はあり得るし、死骸が目を開いて首さしのばすということも土中から堀り出されたのなら不思議ではないし、「笑ひ臭」は半ば腐敗しているからそう見えただけだろうと判断して安心する。だが西鶴が考えていたこうした読者こそ、作者は余程このことが書きたかったのだと推察し納得する。

以上、西鶴は十蔵の決意と死を極めて価値高いものとすることによって、自己の倫理感の一端を明確に示した。十蔵自身が「今となりての病死。さりとは武男の本意にあらず。」と武勇という言葉を用いている。専太郎も十蔵のことを「男なり」と言う。これは公的な武家道徳としてもひろく認められ賞揚さるべきものと西鶴は主張しているわけである。だが十蔵のこの決意の基となったのは専太郎のことを耳にして「専左衛門子なり」と内心に呟いたときの極めて人間的な感情だった。敵として討たれるべき者が前非を悔い自ら進んで討たれようとするのは現実に多くあったか否かは問わず、当時の武士道でも当然認められ賞せらるべき行為であっただろう。「身袋破る落書の團」の文助である。だが十でも述べたように西鶴は読者が文助の行為を肯定し讃嘆するようなことがあり得ないように努力して書いた。それに反し「太夫格子に立名の男」の十蔵は思う存分賞揚している。それはこの人間的感情のためである。そのことを西鶴は専兵衛なる人物を創り出し巧妙に十蔵と対比せしめることによって明確にしている。この章、冒頭から懐旧的な詩情に溢れる中で、人物の複雑微妙な心理と行動が適確に描かれ、両者相まって十蔵の述懐にあった「菟角は夢に極まれり」の浮世観がこれだけの言葉数で表現されている。秀作と呼ぶべき一篇と言えよう。

十七

巻四第二「誰が捨子の仕合」では、樫崎茂左衛門が弟茂右衛門の敵矢切團平を討つとき、弟に息子も甥もいなかったので捨子を拾って弟の養子とし、首尾よく敵討を果たした話が語られ題にもなっている。その茂右衛門が團平にだまし討ちにされた話、それに隠されていたこの事件が露顕に及んだ次第も興味深い。それは團平が家来の九市郎を少しの科で手打ちにするが、明日は処刑と決まった前夜九市郎が婚約者の久米に主人團平の過去の悪事を語

り、久米は九市郎の言いつけ通り、彼の刑死の直後茂右衛門の兄茂左衛門宅に駆け込んでそれを語って死ぬという話である。この三挿話からこの一話が成り立っている。詳しく見てゆく。

ところでこの一話は『武道伝来記』中目下の者をいじめる非道な侍を描く最初の章であろう。これまでに出てきた大勢の悪人たちから探すと、巻一第四「内儀の利発は替た姿」で茶堂休林の坊主頭を扇子で打った金塚敉馬が一見それに近い。しかしよく考えてみれば、いくら家老と茶坊主でも同じ家中の藩士として基本的に身分は対等のはずである。茶坊主は他の藩士たちから馬鹿にされる存在だったらしいが、頭をひっぱたくなど公然の恥辱を加えることは行き過ぎで、伝統や慣習は無視し、権力を振るう出頭家老の敉馬だから犯した誤りである。己の若党九市郎を些細な科で手討ちにする矢切團平は、この時代の世間にはいくらもいた残忍な侍だが、目下を苦しめる侍となると『武道伝来記』の主要人物としては最初の者だ。だが同じこの章の冒頭に出てくる團平と茂右衛門に上意討ちにされる辻岡角弥は、團平に先立ってまずそうした侍として書かれる。

心の海を横わたしにむかし嶋原の舟つきに。辻岡角弥とて浦の吟味役人して有しが御奉公疎略して。明暮奢りを極め京より美女を取よせ。其上他国よりの縁組をかたく御法度を背き。泉州堺の手前よろしき町人の娘をよびむかへ。さま〳〵我まゝかさなりしを家老中ひそかに敉度異見くはへられしに。一圓承引いたさず女を幾人か手打にせし事。其外十二ケ条の悪事横目役より言上申せば御僉儀極り。

角弥の方が後の團平よりも派手に悪事を重ねている。まるで自暴自棄のように思い切ったふるまいだが、上意討ちの危険を感じなかったのかと不思議でさえある。十二ケ条の悪事と言うがここではっきり書かれているのは「女を幾人か手打にせし事」だけである。堺の町人の娘を嫁に取ったこと等も当然入っているのだろうが書かれず、その意味でこの一句は目立つとも言えるが、角弥の数々の悪事が列記された最後にそっと付加されているから、語り手の意志としては強調する気はなさそうだが、そっと付加された言葉は実はひどく目立つことが多い。つまり西鶴は声高に饒舌にではなく小声でそっと言いながら読者に印象づけようとしているわけだ。「京より美女を取よせ」とあるから角弥は女好きと知れ、この手打ちは巻一第二「毒薬は箱入の命」で橘山形部が小梅を処刑したような、厳しい正義の執行などというものではなく、腹立ちまぎれ、あるいは加虐嗜好からと想像される。この頃まではしばしば見られた目下の者に対する侍の残忍非道な行為である。これを一話の冒頭にしかもこのような形で書いた理由は何か。いろいろに考えられるが実際にこの句が働いている動きを見ると、主題である團平の非道がこれによってより普遍化されていると言えるだろう。「奢りを極め」た角弥の悪行の方が「いつとなく奢りて」の團平よりひどかったのはいわば当然で、團平は悪虐の道に入って間もない新入り、角弥は大先輩として印象づけられ、「家来に情をかけず」家来に対する酷薄さが顕著な侍など珍しくもなかった事実を当時の読者といえども再確認させられる。

角弥上意討ちの場面だが、これは生彩あふれる書き方で、今日の読者には極めて難解な場面なのかも知れないが、的確な用語のせいか動作が眼前に彷彿し、動作から茂右衛門團平両名の性格までうかがわれる。

両人上意請て角弥濱屋敷に案内なしに入て。仰せ渡さるゝ段〳〵聞給へと茂右衛門書付讀仕舞へど。團平おくれて不首尾の時。茂右衛門ぬき打に子細なく角弥をとゝめまでさして立のく時。團平言葉あらく最前申合て鬮を取。其方はケ条書を讀役此方打役に極めしに無用の出来しだて。八幡堪忍ならずと眼色かへてつめかくる。

茂右衛門はこのようなせっぱ詰まった場面でも落着き払って行動しているのに、團平は「おくれて不首尾」だったという。剣の力に劣っていたのか度胸に欠けていたのか、おそらくその双方だろう。こういう場合書付を読み終わった瞬間、つまり相手が殿様からの御書付だというので神妙に聴いている、その態度から回復するより前に間髪を入れず斬りつけなければなるまい。一瞬の遅れが相手に必死の反撃の機会を与える。團平はもた〳〵したと言っても遅れはほんの少しだったかも知れないが、「不首尾の時」とあるから角弥は刀の柄に手をかけたか、刀を抜いてしまったか遅れがはっきり形にあらわれたのは間違いない。後に九市郎も「主人おくれて首尾あしき故に」と言っている。つまり茂右衛門ひとりがこの瞬間團平が遅れたと判断して、團平に先んじて刀を抜いたわけではない。團平のせいで当初は遅れて討ち損なったが茂右衛門だからすぐに相手を討ち倒すことができたということであろう。それなのに團平は、自分が不首尾だったことを茂右衛門も自分自身もよく知っており、自分がそれを知っていることを相手も又知っていると知りながら、茂右衛門が早まって籤での決定に背いて角弥を斬ってしまったと難癖をつけ、血相を変えてつめ寄ってくる。こういう馬鹿者は何時何処にでもいるもので、たぶん自分自身に対して無性に腹を立てているのだろう。適確に描いた西鶴に舌を巻く。

茂右衛門すこしもさはがず此義二人承れば。いづれか前後の論に及ばず是両人の働きなり。角弥首尾よく打取こそ仕合なれ。御前の御機嫌なるべし急ぎ給へと首羽織につゝみ立のく所を。うしろより茂右衛門を切付しに

茂右衛門は落着き払っている。團平に理屈を言ってやり込めるでもないし、團平に恥をかかせまいとするでもない。彼はいつも同輩の間で一人傑出しているような存在なのだろう。「此義二人承れば」以下の茂右衛門の言葉は大人びて理性にあふれ、いつもリーダー役をつとめ、自分でもそれは当然と考えることに慣れてしまった男の言葉である。茂右衛門は團平のような卑怯者の心理を知らない。「首羽織につゝみ」の動作もいかにも物慣れた様子だが、まさか團平が背後から斬りつけるとは知らなかった。だが「是両人の働きなり」はちょっと甘いかも知れない。藩の上層部ではどちらの手柄が大きかったのかしつこく詮索するのが普通なのではないか。

次に團平のこの隠された悪事が露れる話で、明日手討と決まった家来の九市郎が牢の格子を隔てて恋人の久米にそれを語る。

たがひのうきを語りつくし我命をとらるゝ程の事にはあらず。さりとはむごき仕かたなり。此怨念外へは行まじそなたもかく成行身の程さぞ不便に思はるべし。何事も主命なれば是非もなし。され共身にあやまりなくて死る事後の世迄の迷ひなり。旦那に此恨みをなして此家失ふ事こそあれ。日外の上意打柏崎茂右衛門殿手に掛て角弥殿をうたれしに。主人お

くれて首尾あしき故に茂右衛門殿を角弥うたれし處を切伏たるやうに御前へ披露申されしが誠は茂右衛門殿を旦那だまし打にして世には手柄ふれける。是畜生なれば此事茂右衛門殿兄茂左衛門殿に告しらせて主人團平をない物にせば我相果ても思ひは残らじと涙をこほす。

何度も言うがこの頃（貞享・元禄期）までは、九市郎のような若党が手打ちになる事件は珍しくもない。しかし手打ちと決まった家来が九市郎のように仕返しのために主人の秘密をばらすということはめったに無かっただろう。恋人にそれを洩らす一夜の余裕、それに久米のような人物を近くに持つ者は少なかったであろう。しかしそれよりも、たとえそうした事情に恵まれた者でも、敢えて主人の秘密を守ったまま殺されてゆく者の方が普通だったと思われる。九市郎のような行動は飽くまで例外的だったに違いない。不当に殺される者が自分を不当に殺す者の悪を言わない。なぜならそれは自分の主人だから、と言うのがむしろ当時の常識だろう。

侍のなかで、知行取り扶持人など普通の藩士、あるいは今は浪人だがどこかの藩に抱えられることを望んでいる者と、それらの侍に仕えている侍との間には画然たる身分上の格差がある。藩士の間の知行の差、藩で果している役職の差などはたとえ石高が百倍であろうと身分の差にはならない。本論では仮に前者を上級武士、後者を下級武士と呼ぶ。下級武士が自分の主人である上級武士に対する忠義なるものは盲目的な程強固だった。上級武士にもそれを当然とする意識があるから、服従は絶対的なものとなり、限度を超えると陰惨なドラマが発生する。上級武士の自分の主君たる藩主に対する忠義はこれとは大分違う。藩主の命令は一応絶対的であっても、諫死などと死を賭せば反対できた。役柄が上の者はそれが職務という者もいた。石高がかなり低くとも上級武士には藩主と身分的には同じという意識があったと推察される。

だから上に引用した、死を前にして久米に語った九市郎の言葉は、当時はほとんどあり得べからざるものであった。だが西鶴はそれを書いた。そして読者の意識が九市郎の裏切りを憎むべき不忠の一語で非難して片付けてしまうことの無いように様々な状況を整えている。立派な侍だった茂右衛門を無言のまま背後から斬りつけるという團平の卑劣さを極力印象づけ、藩主をはじめ世間をだまして茂右衛門の成した仕事を自分の功績と偽り、名誉を自分のものとした狡猾さを強調している。さらに團平の悪行が茂右衛門の残された妻にいかに癒し難い悲しみをもたらしたかを書き、読者の同情心を呼び起こして團平に対する憎悪をかき立てようとする。

しかし九市郎の不忠を読者をして問わしめないためにはやはり何といっても九市郎と久米という当事者二人の書き方が重要である。久米の姿を見ると、九市郎が手打ちになったとき「腰元の久米は屋敷をぬけ出茂左衛門殿にかけ込。此段こ語り舌喰切夢よりはかなく消ける」とある。九市郎の言った通りをすぐに果たした久米の行為はやはり九市郎同様に不忠の極みである。読む者が彼女の不忠に怒り出さないようきわめて簡潔にしかも哀れ深く書いている。「此段こ語り舌喰切夢よりはかなく消ける」と書かれた久米を糾弾できる者はいまい。

以上いくつかの背景と説明のあとで、九市郎の久米に語った言葉を検討する。雨の夜人寝静まったあとにぼそぼそと語る語調を感じさせながら、不当に命を取られる者の恨みが重々しく沈澱している。一方、ひと晩中久米と語り合ったせりふをこのわずかな

語数に要約し、簡潔で論理的でさえある。正反対の二つの性格を九市郎の言葉に与えているのだ。

「我命をとらるゝ程の事にはあらず。さりとはむごき仕かたなり。此怨念外へは行まじ」九市郎の言葉には何の屈折も裏もなくこの上なく直截で簡単明瞭である。命を取られる方の男が自分に加えられる仕打ちのむごさを痛感しその不当さをひたすら恨んでいる。相手の心事への推量、自分の行為への悔恨、反省そのようなものは一切無く、すぐにも「怨念」の語が出、「外へは行まじ」とその怨念の運動の直線性を強調する。この単純にして明解な論理は、西鶴がまず事の残虐性そのものを強く読者に訴えようとしていることを示す。次いで「そなたもかく成行身の程さぞ不便に思はるべし」と続く。「かく成行身の程」は恐りと怨みはやや薄らいで少し高い視点から自分のこれまでの人生を顧み、それは明日終わりになるから初めて悲しみの感情も入ってくる。姿勢が悲哀感のため少し軟化したので「そなたもかく成行身の程さぞ不便に思はるべし」と恋人の同情に訴えている。「何事も主命なれば是非もなし。され共」前述のように主命には絶対服従というのが九市郎のような下級武士の掟である。いくら「むごき仕かた」でも「是非もなし」と諦めるよりほかない。と言いながら「され共」と思い返し、思い返すべき理由を言う。それは罪や過誤の自覚なくして死ぬのは「後の世迄の迷ひ」だから旦那に恨みを晴らすのだと。これは九市郎の言葉の最後の「主人團平をない物にせば我相果ても思ひは残らじ」と同じである。「忠」という絶対的な掟に対抗して、西鶴が死後の世界まで続く「迷ひ」、この世に残る「思ひ」、というはなはだ人間的な要素を立てて拮抗させ、最終的に後者に勝利させているとも言えるが、西鶴の描き方の巧みさゆえ、死を前にした九市郎はこの理屈に藁にもすがる思いで救いを求めているようにも受けとることができる。一般に死すべき人物がその死をもたらした人物に恨みを晴らして死んでゆくとはこうしたものだろう。忠義の儒教道徳に抵抗するのは死の真実が結局は最も強力であると西鶴は考えたのか。それにしても「旦那に此恨みをなして此家失ふ事こそあれ」とは恐ろしい言葉である。先に「雨の夜人寝静まったあとにぼそぼそと語る語調」と言ったが、内容の恐ろしさが自然にこうした語調を感じさせるのだ。論理を積み上げ必然の道筋で出てきた言葉だが、一方死を前にした者の怨恨が、通常言うべき筈の無い人物に言わせた生々しさを持つ。そして出てきたのはあの角弥上意打ちの折の團平の卑劣な悪事、だまし打ちのいきさつである。「日外の上意打柏崎茂右衛門殿手に掛て角弥殿をうたれしに。主人おくれて首尾あしき故に茂右衛門殿を角弥うたれし處を切伏たるやうに御前へ披露申されしが誠は茂右衛門殿を旦那だまし打にして世には手柄ふれける」これは人物の心理の彩など一切抜き去った簡潔な報告である。だがこの犯罪の性格、つまり團平の卑劣さ加減「だまし打にして」とか、藩主までたぶらかした反社会性「御前へ披露」「世には手柄ふれける」は個々の語が冷静的確に指摘する。あの場に九市郎がいたことを読者は初めて知って驚くが、團平が悪事をすっかり見ていた九市郎を意識的にか無意識にか気にしていて機会をとらえて亡き者にしようとした、と解釈するのは間違いである。そんな事は團平の内面には全く無かった。そうでなければ後で多少面倒でも即座に斬っただろうし、一晩牢に入れたにしても人が近付かぬようにしたろう。続く「是畜生なれば」もはっとする程生々しいが、上意打ちの際の團平の行為の真実を衝いた言葉と感じるからである。「侍畜生」とはこの時代侍に対する悪罵の言葉だが、ここでのように通常はそれを最も言いそうにない立場の人物が声

を潜めて、当然の真実を語るという言い方で語るから空恐ろしさと、この上ない説得力を持つ。

西鶴の意図通り当時の読者が九市郎の裏切りに正義を見たかは分からない。当時はこのように主君を裏切るなど、たとえ主君に不当に処刑される人物によってであろうと極悪非道の悪、不忠だった。それを西鶴は何とかしてひっくり返そうとあの手この手で努力している。今一度それをまとめると第一に主君の方の悪を強調、特にとんでもない不忠を含んだものとし、これ以上ない程の反社会的な性格も持たせた。第二に主君の悪行によって生命を失い、または不幸な身の上に陥る人の運命を列挙する。直接表に出ているだけで五名にもなる。第三には当然ながら処刑される人物を極力同情に価する存在と描き出そうとした。ここでは九市郎の許婚者久米である。九市郎はことさら読者の同情を惹くような描かれ方ではない。不忠の臣にこだわる読者の意に背かないようにしているのだろう。だがこの裏切りの不忠という性格以外に九市郎には憎むべき姿が全く見られない。

最後に、茂左衛門による弟の敵討ちの成功については言うべきことがあまりない。気付いた点を箇条書きで述べる。

一、茂左衛門が「弟ながら是は各別義なれば」と敵討を出願したとき、藩が逆敵討として許可しなかったのは、藩主以下、茂左衛門が何とかして美事に敵討を果たすことを期待し、形式的にも非の打ちどころのないものにしたかったのだろう。これは全藩の心理的支援を受けた敵討ちである。

二、團平は極悪非道の悪者だが茂右衛門を後から斬りつけるという最初の腹立ちまぎれの卑怯な罪が基になり、それが次第に大きく膨らんで行ったということもある。冒頭の辻岡角弥の完全な悪党ぶりとは差がありそうだ。「團平其後は世間のよきまゝにいつとなく奢りて」とある。自分の犯した卑劣な犯罪に世間の人々が一向に気付かず、その犯罪のおかげで名誉と富を得るなど世間的に成功した場合、次第に別の非行・犯罪に走ることのない人物は稀だろう。卑劣さの自覚がますます自分に卑劣な行為を犯させる。この一句はその真実をそれとなく、そして的確に示している。(1) 茂左衛門が團平を討ったときの「八月十四日時節を待宵の月見。所の人をさそひ。團平濱邊に出しを」はちょっと意外の感を与える。近所の人をさそったというのは以前の團平と違っている。團平は自分の最初の悪事が露われてかえってすっきりしたのではないだろうか。八月十四日の月のように澄みきった心境かどうかは別として。

三、当然の成り行きとして茂左衛門の敵討ちは成功する。この一話の語り手は諸手を挙げて讃美している。「天晴はたらき残る所なし」「武男此時國中に其名をあげける」「家の悦びをかさね菊酔をすゝめて。千秋楽を諷ひ柏崎の名をいはゐけるとぞ」だがこの祝福すべき結末の強調は、團平の悪の数々の被害者の、とり返しのつかない不幸を逆に照らし出しもする。西鶴はその効果もねらったのだ。

四、捨子を養子にした茂左衛門の才覚は大成功だった。藩主がその事を完全に肯定していることは、敵討の成功に対する藩中の期待の強さを示す。それをぜひ「子方の者」でなければならないとした当時の制度は形式主義的だとする批判は読みとれない。(2) それよりもこれは誰の子とも知れぬ茂吉が、立派な武士

に成長するかも知れぬ可能性を示し、支配層たる武士にふさわしいか否かは決して生まれではないことを強く言う。團平や角弥はもち論武家の生まれだろうが、支配層の一員には全くふさわしくなかったことをはっきりさせている。

この話は当時現実にしばしば見られた、目下の者に対する武士の極悪非道を『武道伝来記』中ではじめて描いている。既存の善悪の規範など顧みようともしなかった西鶴でも、残虐な行為を悪とすることだけはまず否定できない真実だったように思われる。そうした残虐行為が一番発生しやすいのは上級武士と下級武士の間だろうが、西鶴はおのれが町人階級の出身だからと言って、特に下の階層の側に立つでもなく、かなり冷静に事の次第を見つめていると言える。そのために強固な倫理の基盤たる「忠義」の力を多少ぐらつかせる必要があったのだ。

（1）西鶴のこうした犯罪観がまざまざと表現されたのは『本朝二十不孝』巻二の**交**「旅行の暮の僧にて候」であろう。拙稿「西鶴の描いた恋愛――フランス十七世紀文学と対比して――」（『西鶴新展望』勉誠社　平成五年刊所収）257ページ以下参照

（2）敵討の捨子利用は興味深いので、この作品については次の見方が普通なのかもしれない。

「…この話は、武士の一分や義理を守るための敵討ち遂行に必要な形式を整えるために捨子を利用するというもので、武士社会の習俗として形式化された敵討ちのむなしさを示している。」植田一夫『西鶴文芸の研究』笠間書院129ページ

だが、この一話が「敵討ちのむなしさ」を書いているというなら、説明が必要だ。

（未　完）

平成十四年十一月稿